日　時	令和 6（2024）年 7 月 1 日（月）
場　所	幸田町教育委員会
出席者 （敬称略）	幸田町新博物館建設検討委員会 　黒柳孝夫（愛知大学 名誉教授）　※委員長 　荒井信貴（名古屋大学 講師） 　神谷浩（徳川美術館 副館長） 　武村雅之（名古屋大学減災連携研究センター 特任教授） 　岩下英司（深溝小学校 校長） 　神尾義貴（町民代表） 　天野広子（町民代表） 　本多宣子（町民代表） 　池田和博（幸田町教育長） 　菅沼秀浩（幸田町教育部長） 幸田町教育委員会　文化スポーツ課 　夏目守雄（教育部次長兼文化スポーツ課長） 　神取龍生（文化スポーツ課課長補佐文化グループリーダー） 　志賀光浩（文化スポーツ課スポーツグループ特命専門員） 　石原憲人（文化スポーツ課文化グループ主査） 　稲垣彩乃（文化スポーツ課文化グループ学芸員） 株式会社　丹青社 　﨑山幸子 　久保はるか
目　的	第 1 回委員会

I. 開会挨拶

・　（委員長）博物館建設検討委員会は 2 年前に立ち上がった。町がなぜ博物館を必要としているのか、話をしたい。幸田町は住民 5 万人を目指している。近隣自治体を見渡すと、魅力的な地域は、歴史・文化を中心にまちづくりをしている。幸田町も同様に郷土資料館を中心にまちづくりを進めてきたが、現状では重要文化財をはじめ、町民に見てもらいたい資料を陳列するための十分な空間や機能がない。この状況において、博物館建設が必要だと考えた。今回、委員として新たに加わっていただく方として、学校教育の視点、町民の視点で、広い視野で見て、率直に発言いただける方にお願いした。新しい委員のみなさんは、学校の先生を経験されている。先の 2 年間は基本構想として進めた。今年度進める事業は、基本計画である。したがって、徐々に課題が具体化してくることになる。委員のみなさんには、肩書にとらわれず、率直な感想、ご意見を発言するようお願いしている。基本構想の内容を基本計画で固めていきたい。

1.　基本構想からの委員会組織変更について

・　（事務局）委員会の名称が「幸田町新博物館建設検討委員会」に変更となった。
　　委員の増員があった

2.　スケジュールについて

・　（事務局）2024 年 7 月より開催される委員会に並行して、年始頃にパブリックコメントを実施する。2025 年 2 月にパブリックコメントをふまえた修正を施し、3 月に基本計画を策定する予定である。2024 年 9 月後半から 10 月頃にワークショップを開催する予定である。

3. 建設予定地について

・（事務局）建設予定地は、現郷土資料館がある深溝ではない。公有地であることは前提として協議をすすめ、ハッピネス・ヒル・幸田、幸田中央公園、文化広場、現資料館の土地の 4 案からアクセスや図書館等他施設との連携等を加味して検討し、ハッピネス・ヒル・幸田に決定した。この敷地内で、どこに建設するか、図書館連携や安全性等も勘案した際、図書館横が第一候補という話になっている。次回以降の委員会では、駐車場の問題等も含めて検討していく予定である。

・（委員長）ハッピネス・ヒル・幸田の建設の初期段階では、図書館横の現在駐車場になっているあたりに、ギャラリーと郷土資料館が建設される予定であった。委員会としては、図書館横の駐車場あたりがふさわしいという話になっている。今後公表する過程において、建設予定地検討の経緯について、町民、議会にしっかり説明していく必要がある。

II. 幸田町新博物館基本計画について

4. 基本的な考え方について

・（委員）町民には、「目的」「役割」「基本理念」というステージを 1 つに絞って整理し、わかりやすく呈示した方がよい。「楽しむ」「理解する」「感動する」「創出する」という利用者視点の 4 つのフェーズはよいので使っていただきたい。

5. 事業活動計画（案）全体について

・（委員）今後、事業の選択と絞り込みを行う必要がある。町民のすべての要望等を聞いているとなかなか落としどころが見つからない。解決していくうえで、博物館の核になる目標を考えていくとよいだろう。

・（委員）市民参画について、あらゆるフェーズで考えるのはよいが、削る部分も考えなければならない。ポスターの袋詰め程度で満足する人もいれば、展覧会の企画への参加といった専門的なことをやりたい人もいる。範囲を検討することが必要だ。

6. 事業活動計画（案）：組織体制について

・（委員）博物館が文化財保護の役割を担うのか。埋蔵文化財保護の行政としての役割分担は気になる。「収集・保存」の「基本的な考え方」として文化財レスキューが出ていることに、違和感がある。もちろん、文化財に関しては博物館も大きな役割を担っているが、その保護の体制について今後どう考えていくのか。

・（事務局）博物館と文化財保護行政の役割を包括するかたちで考えている。博物館業務と文化財保護業務でグループが分かれるかもしれないが、一つの施設の中でやるものと考えている。幸田町の規模を考えると、博物館機能と文化財保護機能を分けるのは難しいだろう。展示と文化財保護の両方をできる人が必要になる。

・（委員）広報や、発掘や資料整理等のボランティアの面倒も学芸員が見ていくのか。

・（事務局）そのようになると考えられる。

・（委員）文化財保護の担当グループと博物館と合わさるとなると、業務量は多い。それなりのスタッフが必要だ。同じ組織にしてしまうと、組織がコンパクトになり、兼務でやればいいという話になってしまうことが危惧される。

・（委員）この町の規模なので、博物館機能と文化財保護の役割を一つにするのがよいと思うが、情報共有や役割の整理を、現場だけではなく町の体制もふまえて検討する必要がある。

・（委員）学校団体に来てもらう際、学校の先生がどの程度教育してくれるのかを明確にしておく必要がある。学芸員だけは対応しきれない。具体的にどこまでやるのかを明確にしておくべきだ。

・（委員）社会の授業で教員が子どもたちを連れて博物館・資料館に行く際、担任として子どもたちを引率していた。学芸員にすべてをお任せするといったことはない。
・（委員）完全に学芸員に子どもを預けて、教師が何もしないということはない。博物館に行く場合は、事前にその目的を子どもたちに指導している。教員には詳細の知識はないので、学芸員に手伝っていただくことがある。
・（委員）学校連携も学芸員が張り付くのは難しい。教員に、博物館に来ればできることや博物館でやってほしいことのメニューを渡して、あとは任せてしまうしかない。幸田であれば、すべての学校に来てもらうことを前提に考えていけばよい。
・（委員）幸田町の新入職員に、幸田町の歴史をきちんと教えているか。新入職員への教育研修も博物館がやっていくべきだ。愛知県は、防災減災センターがやっている防災減災カレッジを、愛知県の新入職員全員が受講するようにしている。そのような具体的なイメージを持って、博物館以外の職員を巻き込まなければ、まち自体が博物館活動を盛り立てていくといった体制をつくるのは難しい。どこまでやるのか、コミュニケーションを取っていく必要があるのではないか。すべて学芸員がやるのは無理だ。いまの段階である程度想定しておく必要があるだろう。
・（委員）行政に携わる人は、文化的意識のある人でなければならない。これは博物館の建設・運営に関わってくる。武村委員の新入職員への研修に関する提案は非常に大切なことだ。学校の先生も重要である。学芸員がリードするのは重要だと思うが、役割分担も整理しなくてはいけない。
・（委員）昔、新採教員が指導主事の案内で深溝断層や郷土資料館等をめぐることを、新任研修の一環として行っていた。

7. 事業活動計画（案）：収集・保存について

・（委員）収集で肝要なのは、担当者が変わっても情報が途切れないことである。館蔵品と預かったものや借用品を、同じところに置いて混乱してしまうような館もある。これは最も大事なところなので、しくみをつくるときに十分注意しなければならない。
・（委員）「栃木県立博物館資料の収集、保管、活用等に関する要綱」は当たり前のことが書かれているが、これがいちばんである。

8. 事業活動計画（案）：調査・研究について

・（委員）改正博物館法のもと、昨年、博物館登録の審査を行った。いままで行われてきたような、収集、展示、調査・研究、教育普及の研修だけではなく、ファンディングやマネージメント、マーケティングも研修の項目に入っている。登録審査の際のチェック項目になっているので、このあたりも入れておく必要がある。
・（委員）研究は、資料の研究だけではなく、展覧会の手法の研究等も含まれる。研究の対象を幅広くしておくほうがよい。

9. 事業活動計画（案）：展示について

・（委員）事業活動計画案に記載された展示をすべて行うには、大きなスペースが必要になる。常設展示、企画展示、ギャラリー展示を上手く融合させ、現実問題として抑えるところは抑える必要がある。

10. 事業活動計画（案）：教育普及、情報発信、広報・コミュニケーションについて

・（委員）教育普及以降は項目が多すぎる。教育普及、情報発信、広報・コミュニケーションの意味づけをしっかりしなければならない。私は「教育」と「普及」しかないと考える。教育は、資料をいかに理解してもらうかという事業である。普及は、博物館がどんな活動をしているかを伝え、サポーターを増やす事業だ。教育と普及の 2 事業について整理する必要がある。最も重要なのは、来館者におもしろかったと思ってもらうことだ。情報発信については、どの事業でも

情報発信している。広報・コミュニケーションについては、ほかの事業に付け加えることができるだろう。人員を増やせるわけではないので、コンパクトにやっていかなければいけない。

11. 展示計画（案）全体について

・ （事務局）現在の展示計画（案）を精査し、実現可能なかたちにする必要があるとの意見をいただいた。体験を重視した展示が本博物館のメインとなる。
・ （委員）重要文化財や国宝等について記載があるが、規模に関係なく、超一流のものも展示できる機能を備えるということを頭に入れておいていただきたい。この点は収蔵の問題にも関わるので、施設計画のなかでも記載する。

12. 展示計画（案）：学校団体の来館について

・ （委員）学校からの見学について、学年単位での来館は、何年生を想定しているか。（神谷委員）
・ （委員）現在の郷土資料館は、小学校３年生が見学に来ている。中学生はほとんどない。クラス単位で来るか学年単位で来るかは学校の規模による。1 学年 5 クラス程度ある学校の場合は 2〜３クラス単位、100 人くらいが来る。
・ （委員）収容能力についてよく考えておかなければならない。工夫できることと、施設として準備が必要なことははっきりさせる必要がある。
・ （委員）小学校は郷土資料館に学年単位で来館する。新博物館ができるハッピネス・ヒル・幸田までの移動手段は、バスだろう。生徒数が多い学年だと、借り上げバスになる。来館できるのは年に１回程度かと思う。
・ （委員）バスで博物館に行くこと自体が学習として成り立つならば、コースに取り入れるのもよいと思う。館内の体験だけでなく、プラスの内容もあると、子どもの来館がより増えるだろう。

13. 展示計画（案）：地域学習をふまえた展示について

・ （委員）年に１回程度の来館ならば、学校団体は常設展示をさっと見る程度になる。そのようなものとして考えるか、学校としてもう少し詳しく教えたいと思うか、程度問題でずいぶん変わってくる。あとは家庭に任せることになるのか。そのあたりの位置づけも明らかにしておくべきだ。
・ （委員）歴史の展示があるならば、小学校高学年や中学生も見学可能になる。たとえば、6 年生が青塚古墳について学習するメニューを考えれば、今までよりも見に行く子どもたちの幅が広がるだろう。細かく見るなら、まず教員引率のもと新博物館で興味を持ってもらって、実際に青塚古墳に行ってから、もう一度新博物館に家族で来てもらうのがよい。
・ （委員）岡崎の小学校では、徳川家康に関する学習が行われている。幸田でも、町民として知っておいてほしい基本的なことが書かれた歴史読本を作ってみてはどうか。三河武士は岡崎の人だけではない。幸田にどのような三河武士がいたか、彼らがどういう仕事をしたのかを、幸田の子どもはみんな知っているようにしておかなければならない。幸田町は歴史読本を作っているのか。
・ （委員）歴史に特化しているわけではないが、中学年向けに読本は作っている。三河地震も取り上げている。読本の内容を考えると、小学校の３年生時に１回、４年生時に１回というペースで博物館に来ることができるのではないか。

14. 展示計画（案）：タブレットを使った展示について

・ （委員）小中学校の子どもたちを大事にするという考えはよい。最近の教科書はビジュアル的にも分かりやすく、タブレットを使って次のところを調べに行けるというように工夫が施されている。展示計画（案）「（３）詳細展示のテーマ展開」の表に記載のテーマとトピックが、子どもたちの学習項目のどこに関わるのかを十分に洗い出し、リンクさせられるとよい。
・ （委員）教科書についている二次元コードのリンクから展示解説を見て、そこから実際の展示を見

に行くという流れも考えられる。
・（委員）教員は幸田町における文化財の所在地等が記載されている文化財巡りの冊子を、授業前の勉強に使っている。この冊子に二次元コードが追加されると学習に広がりができる。
・（委員）展示を考えるうえで、タブレットを使った学習は大前提になる。タブレットの活用によって、展示室の狭さや展示資料の少なさをかなりカバーできる。
・（委員）三河地震の断層巡りのコンテンツも作れそうだ。みんなが歩いているところも断層だったりすることを知ると、みんな驚いて興味を持ってくれる。博物館の企画で、現地をめぐる会等があるとよい。他館では、友の会等で定期的に現地をめぐるイベントを実施している。幸田町では半日くらいのイベントを実施できるのではないか。

15. 展示計画（案）:「本物」について

・（委員）博物館として何を「本物」として見せたいかが問題になる。本物が持つ裏側の情報を深める点で、タブレット等の機器が使うことができる。
・（委員）読本等で学習した子どもたちが、博物館で本物を見ていくという流れになる。民具でも手擦れのついた本物があると嬉しいものだ。そういうものに特化した展示ができると面白い。そういうことをやっている施設はまだないのではないだろうか。
・（委員）映像を見るだけで、みんな分かったような、経験したような気になってしまうことは問題だ。たとえば、自然釉薬と施釉したものとの違いは、実物を見なければ分からない。映像ではおもしろさが伝わらない。実際に火をつけて、灯りを経験し、どうやって火が点くのかということを知ることが大切だ。子どもたちが実際に触って体感するのを意識してやらなければならない。
・（委員）博物館で体験できるならば、行ってみようという気持ちになる。
・（委員）大規模な館で体験に特化するのは大変だが、コンパクトな館で内容に深さのあるものができれば、展開のしようがあると思う。
・（委員）学校の先生から、体験展示が学習に役立っていると、信頼を得て応援いただいている館もある。学校の応援を得ることは絶対必要だ。先生方から「助かっている」と言ってもらえるようにすればよい。来た子どもみんなに体験させるのは大変なので、すべてとは言わないが、いろいろな体験と組み合わせた見学メニューを用意すると、先生からも生徒からも喜んでもらえる。入館者の大半が小中学生でもよいと思う。大人だけでは来館者数を増やすことは難しい。
・（委員）常設展示をつくる段階で学校の先生を入れている館もある。
・（委員）普段はしまっておけるような展示キットを作っておき、学校から子どもたちが見学に来た時に出して民具体験を提供するというように、ある程度キット化していくのがよい。民俗資料ならキット化も可能だ。

16. 展示計画（案）：常設展示について

・（委員）概覧展示、詳覧展示という言葉について、現在は概念を区別するために使っているが、最終的には出てこない言葉だと思われる。概覧展示、詳覧展示という考え方として、きちんと置いておくとよい。
・（委員）基本計画においては、常設展示をそれほど深めることはできないだろう。博物館の一番の核になる「菱池を軸にして考えた」というようなことを明確に呈示しておいて、それを軸に展開させるというところを書けばよいかと思う。基本的な考え方の（1）（2）で何を展示するのか、（3）で手法の特色、（4）で技術面について整理した方がよい。詳しいことはテーマ展開の項に記載の項目を上げておくくらいになるだろう。
・（委員）本物を見せたり、ハンズオンがあったりと、展示にバリエーションがたくさんあると、結構大変になる。
・（委員）常設展示では、幸田町の歴史を学べることが重要である。菱池に焦点を絞った展示がで

きるのはよい。それと子どもたちに伝えたいことは別に考えてもよいのかもしれない。

17. 展示計画（案）：企画展示について

・ （委員）企画展示室まで設けるのか検討すべきだ。体験ができる部屋を別に設けている館もある。幸田町の場合はそのようなことはできないので、あらかじめ民具のキット等を作っておいて、学校スケジュールともすり合わせをしたうえで、企画展がない期間等に空いているスペースで使えるようにするというのも方法の一つだ。
・ （委員）企画展示室を別でつくるなら、企画展を年何回開催するのか検討すべきだ。企画展示室が空きっぱなしの状態は望ましくないので、学校とリンクできるようなものを用意したり、空いている期間はギャラリーとして貸し出したりするといった発想があってもよい。

18. 展示計画（案）：ギャラリー展示について

・ （委員）ギャラリー展示は図書館のギャラリーと競合するとの意見もあるが、確保をお願いする。
・ （委員）博物館のギャラリーに展示することがちょっとしたステータスになるとよい。

19. 全体について

・ （委員）記述について「重視する」「対象とする」等の表現は、町民には伝わりにくいのではないか。表現を工夫してほしい。「利用者」と「来館者」の違いについても、今後検討していただきたい。
・ （事務局）分かりやすい表現を考えたい。

20. その他

・ （事務局）ワークショップを 9～10 月ごろに実施する予定である。二十歳になる町民と、多世代を対象として、それぞれの博物館に対する意見交換をしていきたいと考えている。

III. 閉会挨拶

・ （教育長）建設的な意見を多数いただき、ありがたい。今年 3 月に武村委員の減災館を訪問した。減災館で印象に残っているのは、大きな写真である。もし震災が起きたら、どこまで被災するのかというのが一枚で見ることができる。自分の住む地域が浸水してしまうのか、そして幸田町に地震が起きたときにどのような被害が起きるのかを知れたことが特に印象に残っている。博物館の建設を考えた際、子どもたちや町民が学べてよかったと思うようなものがある施設になるとよいと思った。博物館建設検討委員会での議論を役場や議会に投げかけると、博物館も必要だけど、体育館も必要だという話になる。私は、他施設も必要だが、博物館も必要だというスタンスを取っているが、町民に必要なものについて議論するのは有効である。我々は博物館をつくる前提に立っているが、町民が博物館を作りたいという機運を醸成する必要がある。広報に「こちら博物館準備室」の連載を設け、先月号で三河万歳を紹介した。この連載は年に 4 回くらいのシリーズにして、担当を決めて幸田町の歴史文化遺産を町民に広くアピールしていくことになっている。この会議では、博物館がどうあるべきかをとことん追求していくとともに、町民や議員へのアピールも考える必要がある。今後も会議が続くが、引き続きお願いしたい。